

「パウロ、アテネに来る」

2016年07月19日

使徒言行録 17章 10節～21節。パウロはアテネで二人を待っている間に、この町の至るところに偶像があるのを見て憤慨した。それで、会堂ではユダヤ人や神をあがめる人々と論じ、また、広場では居合わせた人々と毎日論じ合っていた。また、エピクロス派やストア派の幾人かの哲学者もパウロと討論したが、その中には、「このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか」と言う者もいれば、「彼は外国の神々の宣伝をする者らしい」と言う者もいた。パウロが、イエスと復活について福音を告げ知らせていたからである。そこで、彼らはパウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが説いているこの新しい教えがどんなものか、知らせてもらえないか。奇妙なことをわたしたちに聞かせているが、それがどんな意味なのか知りたいのだ。」すべてのアテネ人やそこに在留する外国人は、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、時を過ごしていたのである。

パウロは、ベレアでユダヤ人たちに襲われそうになったので、信者になった人々に連れられ、船でアテネに来た。アテネはソクラテス、プラトンを輩出した哲学の町で、世界最高の知性と豊かな精神文化を持つ町として誇っていた。パウロは遅れて来るシラスとテモテを待つ間、アテネの町を探索した。町の至るところに神々の像が立っていた。アテネの人口よりも偶像の方が多かったと言われるほどである。パウロは、偶像を見て憤慨した。神の像を決して作らないユダヤ人から見ると、愚かに見え、腹立たしく思えたのであろう。

パウロの宣教への思いはいつでも、どこでも燃えていた。安息日にはユダヤ人の会堂に行き、ユダヤ教徒とユダヤ教に改宗したギリシア人に語り、また、アテネの人々が論争する広場（アゴラ）に行き、そこに集まる人々と論じ合った。パウロは言葉を尽くし魂を注ぎ出して、主イエスの十字架と復活の福音を語った。

アテネでは当時、エピクロス派とストア派の二派が哲学の主流であった。エピクロス派は「快樂派」、ストア派は「禁欲派」と訳されている。両派の哲学は名称からして対極にあり、もちろん異なる思想を展開している。しかし、共通していることは、地上の肉なるものを蔑み、否定する思想であった。この思想が、パウロの語る主イエスの復活信仰と衝突し、決裂したのである。

パウロが幾人かの哲学者たちと討論したところ、彼らは「このおしゃべりは、何を言いたいのだろうか」また「彼は外国の神々の宣伝をする者らしい」とパウロに興味を持った。「おしゃべり」と言われているが、元来「種を捨てる者」という意味で、他人の思想や知恵の受け売り屋、饒舌家を指す。パウロは「おしゃべり」に見られ、饒舌だったのである。「外国の神々を宣伝する者」と見られたことは、その通りである。

哲学者たちはパウロをアレオパゴスの丘に連れて行き「あなたが説いているこの新しい教えがどんなものか、知らせてもらえないか。奇妙なことをわたしたちに聞かせているが、それがどんな意味なのか知りたいのだ」と言った。アレオパゴスは哲学者たちの論争の場であった。哲学者たちはお金と時間を持って余し、豪華な服を着て、町を逍遥しながら、何か面白い議論はないかと時を過ごしていたのである。「おしゃべり」で、外国の神々について語っているユダヤ人のパウロは恰好の論争相手に見えた。一方のパウロは、高い知性を誇る哲学者たちに福音を語る場が与えられたと小躍りして喜んだであろう。アレオパゴスでパウロは大説教を語り始める。